哲学で標準化に抗う
——『ウィトゲンシュタインのフェミニスト解釈』（アレッサンドラ・タネシーニ著）を読む

立教大学
槇野沙央理
MAKINO Saori

要旨

本稿は、アレッサンドラ・タネシーニによる『ウィトゲンシュタインのフェミニスト解釈』の前半部分を検討するものである。タネシーニの解釈の基本的態度は、二つの仕方で特徴づけられる。第一に、モダニズム精神における葛藤としてウィトゲンシュタインのテクストを読むことである。第二に、文体（スタイル）に着眼し、比喩や詩的表現を通じて進められる探索のありようを尊重することである。これらを基本とするタネシーニの読みを受け入れることで、私たちは、伝統から切り離された主体の自律性と自己充足とを生きねばならなかったウィトゲンシュタインの実存的な困難を、そのテクスト上で体験することになる。それは、テクスト上で与えられた比喩を、イメージを差し引いた本体へたどり着く手段として扱ってしまうことで、比喩がもつ、フィクショナルな世界を想像し普段とは異なる視点を働かせる力を矮小化してしまうことである。これによって、私たちは、自分たちが置かれた日常を理解するための資源を捨て去ってしまうことになる。こうした示唆をもつタネシーニの解釈によって、私たちは、フェミニズム的困難に置かれた個人が被っている状況にフォーカスすることができる。個別性・特殊性に着眼する構えをとり、「標準化」・「規格化」に抵抗しながら、諸個人の実感に即した「女性」の捉え直しを進めるために必要なセンシティビティを獲得することができる。

1　はじめに

近年、フランス哲学の考え方や方法論を基礎とした「フェミニスト現象学」[1]

[1] 具体的には、この呼称を冠した論文集『フェミニスト現象学入門：経験から「普通」を問い直す』(2020)、『フェミニスト現象学：経験が響きあう場所へ』(2023) が挙げられる。「フェミニスト現象学」は、ボーヴォワールの『第二の性』を端緒として、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、フーコーらの仕事に影響を受けて、「社会的通念や規範が当事者に深く身体化され、その経験を形づくっていることをまずは明ら

や、現代英米圏の分析哲学を基礎とした「分析フェミニズム」[2]の日本語の文献が出版されている。国内の西洋哲学研究界においても、フェミニズムの理論的課題および実践的課題の解決のために、哲学的なアプローチがなされることが知られるようになってきた。

しかしながら、一方では、「哲学」という数千年の歴史を誇る自律した「学問」があり、他方では、「フェミニズム」という 19 世紀末から著しい盛り上がりを見せる「ムーブメント」がある、という認識はまだ揺らいでいないだろう。

この認識は、一見すると、特に問題がないように見えるかもしれない。確かに、「哲学」に長い歴史があると語ること、「フェミニズム」が新しい運動であると語ることは、大雑把な構図を作り出してしまうとはいえ、誤りとは言えない。しかしながら、この認識は、哲学がそのありようからして当然取り組んでよい試みを排除するような考えを容易に導くと思われる。

その考えとは、「哲学」は「フェミニズム」と関わらなくとも成立可能な領域ではあるが、「フェミニズム」に寄与することは可能であるので、利他的な理由で（哲学自体にさほどメリットはなかったとしても）それを行うのである、というものである。この考えには、比較的見てとりやすい問題がある。それは、自身がどのような営みであろうとするかを絶えず自問自答する「哲学」が、自身に由来する権威主義・植民地主義と向き合う「フェミニズム」的な観点を無視して、問題なく行われうるという問題である。つまり、フェミニズム的な観点を有することで初めて十全に行われる探求があることを全く想定しない過誤がある。

「哲学」の営みとして、「フェミニズム」の理論と実践とを展開することにより、哲学研究は、フェミニズムの理論的課題および実践的課題の解決に寄与することはもちろん、哲学自体が、自己吟味の強力な契機を内包した知として誕生し直すことができるのではないか。

この射程のもと、哲学がどのような問いに突き動かされる営みであるかを思索し続けたウィトゲンシュタインのテクストを、「フェミニスト解釈」しようとす

かにし」（中澤 2023, p. i）、その後展開を続けている領域である。

[2] 分析フェミニズムの文献で、日本語で出版されたものとしては、単著にケイト・マン（2019）『ひれふせ、女たち』、ミランダ・フリッカー（2023）『認識的不正義』、論文集に『分析フェミニズム基本論文集』（2022）がある。

る、アレッサンドラ・タネシーニ[3]の試みを検討したい。タネシーニの『ウィトゲンシュタインのフェミニスト解釈（原題 *Wittgenstein: A Feminist Interpretation*）』（2004）は、ウィトゲンシュタインの仕事を、モダニズム的精神によって、すなわち、自律的で独立した人間観の昂揚によって疎外された人のためのテクストとして読む。これにより、「女性」としての役割を担わされてきた人々の抑圧を解きほぐす一助になることを目指している（ポイント①）。それと同時に、哲学が自身の「クィア性 queerness」（ibid. p. 32）を内部の働きで「標準化」（ibid. p. 49）してしまう傾向に自覚的となり、哲学が自身を権威とする機構を詳らかにしようとしている。つまり、哲学の自己明晰化のヒントを示唆してもいる（ポイント②）。本稿では、以上の二つのポイントに沿って、タネシーニの試みを検討したい。

『ウィトゲンシュタインのフェミニスト解釈』（略して WF）は、五章からなる。一章と二章では、WF の基本的なコンセプトが示される。三章から五章では、それぞれ、『論理哲学論考』（および「倫理学講話」）における「人生の意味」、『哲学探究』において吟味される「心的活動は視界から隠されている」（WF p. 89）という像、最後に、政治哲学の領域でシャンタル・ムフによって提起された政治的共同体のパラドックス[4]をテーマとしている。本稿では紙幅の都合上、WF の基本的な考えを述べた一章と二章とを取り上げる。

以下では、次のように論を展開する。本稿 2 節では、WF の一章と二章とを検討する。WF 一章では、ウィトゲンシュタイン哲学が内面化したモダニズム精神との格闘であったことが述べられる。これは、WF 全体のフレームワークである。WF 二章では、一章のフレームワークを、私たち読み手が引き受けることで、どのようにモダニズム精神との格闘を体験するかの方法が示される。それは、ウィ

---

[3] アレッサンドラ・タネシーニは、現在、カーディフ大学（ウェールズ）に在籍し、主としてフェミニスト認識論を研究している哲学者である。

[4] 本稿では詳しく検討することができないが、そのパラドックスは、次のように提示される。「常に「構成的外部」、すなわち共同体の存在条件そのものである共同体の外部が存在するだろう。「われわれ」を構成するためには、それを「彼ら」から区別することが必要であり、かつ、すべての合意形成は排除の行為に基づいている。そのため、政治的コミュニティを可能とする条件は、同時にそのコミュニティの完全な実現を不可能とする条件でもあることを認識することが不可欠だ」（Mouffe 1995, p. 36）と言われる。

トゲンシュタインの文体（スタイル）を標準化しようとする傾向を自覚することである。そのうえで、3 節では、WF のフレームワークを実装し、フェミニズム的困難に置かれている個人に、どのような示唆があるかを考察する。最後の 4 節では、ウィトゲンシュタイン哲学をモダニズム精神との格闘として読む WF が、いかにフェミニスト解釈であるかについてまとめる。

2　WF のフレームワークとその引き受け：内面化したモダニズム精神に読み手が向き合う

本節では、WF の基本的枠組みを確認する。まず、「まえがき」にて示される二つの態度を確認する。これら二つの態度はそれぞれ、一章と二章の内容を準備する。WF 一章では、モダニズム精神との格闘としてウィトゲンシュタイン哲学を読むというフレームワークが示される（本稿 2.1）。次に、WF 二章では、実際にこのフレームワークを引き受けることで、いかに読み手が、モダニズム精神との格闘を体験することができるかの方法論が述べられる（2.2）。

さて、WF の「まえがき」（WF pp. vii-ix）では、二つの基本的態度が述べられている。第一に、タネシーニは、ウィトゲンシュタイン哲学をモダニズム精神の「批判 critique」（WF p. viii）として読む。「モダニズム」は、文学・演劇・絵画・建築・デザインをはじめとして、あらゆる文化現象について論じることを可能にするアンブレラタームである。全ての領域において通ずる「モダニズム」の定義は困難であるが、ここでは、「特定の属性や階級等からなる伝統的な共同体が醸成する価値観の中で自己が形成されるという考えを退け、時代的制限から超越した主体のありようを切望する」[5]精神性を指すことにしよう。

第二に、タネシーニは、文学研究のような手法でウィトゲンシュタインのテクストを扱うことを試みている。タネシーニの手法は、ウィトゲンシュタイン自身の、「哲学にたいする私の態度は、「そもそも哲学は、詩のように作ることしかできない」という言葉に要約できるだろう」」（CV p. 28）、「すぐれた比喩（Gleichnis）は知性を新鮮にする」（CV p. 3）という言葉に依拠する。

[5] タネシーニは、モダニズムについて複数の箇所で少しずつ特徴づけを行なっているので、それらを踏まえて筆者が簡単な定義を与えた。その際、平出(2004)を参照した。

しかしながら、タネシーニが指摘するように、これまで多くのウィトゲンシュタイン研究者は、これらの言葉を尊重してこなかった（cf. WF p. 32）。また、一般に哲学研究者は、哲学のテクストに見られる比喩や詩的な表現を、「正統な」論の進め方や立て方から外れるものとして除外しがちである。研究者は、そうした表現を用いることを否定しまではしないものの、あくまで何らかの主張や構想を読み手に伝えやすくするための便宜として扱うことが多い。言い換えれば、哲学者の比喩や詩的な表現は、他の言葉でパラフレーズ可能であり、それどころか、パラフレーズされることで初めて「正統な」論の進め方になるとみなされてきた。

これに対しタネシーニは、哲学者の比喩や詩的な表現は、論を進めるにあたり、まさに比喩や詩的な表現であることに意義があると考えている。つまり、比喩や詩的な表現を用いることを、哲学が十全に行われるために必要な手法として積極的に評価しているのである（cf. WF p. viii, pp. 13-14, sec. 2.1）。

二つの態度から、タネシーニは、WF において、モダニズム文学としてウィトゲンシュタインのテクストを読み解こうとしている、と言えるだろう。こうした試み自体は、WF の前後に複数の例がある（cf. Perloff 1996; Ware 2013, 2015; Vinten 2021）。だがタネシーニの目的は、タイトルが表すように、「女性」[6]がどのような「抑圧 oppression」を被ってきたかを明らかにし、「解放 liberation」をもたらすことである（cf. WF p. vii）。WF は、モダニズム文学としてウィトゲンシュタインのテクストを読み解くことで、フェミニズムの課題にこたえる知識一式（言葉や考え方、語りの方法）を与えようとするのである。

これらを念頭に置き、以下では、言葉を補いながら WF の一章と二章とを解説する。

2.1　内面化したモダニズム精神との格闘

「まえがき」でタネシーニは、ウィトゲンシュタイン哲学はモダニズム精神の

[6] 「女性」という言葉は WF では特に吟味されることなく用いられている。このことから、WF が提供できるフェミニスト解釈は、あくまで男女二元論を前提としたものではないかという批判を受けるかもしれない。なお、本稿では、「女性」という言葉を用いる場合には、できる限り直後で短くパラフレーズするようにし、無意識的にシスジェンダー女性を前提としないよう注意する。

「批判」だと述べるが、この表現には注意が必要である。というのも WF 一章では、モダニズム精神はウィトゲンシュタインにとって「治療 cure」（WF p. 7）の対象すなわち「病 illness」（WF p. 7）だと述べられているからである。これが意味することは、ウィトゲンシュタインが、モダニズム精神を単に退けたということではなく、むしろ退けることができなかった、つまり自己を疎外する仕方で引き受けてしまったということである。

WF 一章において「モダン modern」は、主体の「自律性と自己充足 autonomy and self-sufficiency」（WF p. 1）だと特徴づけられる。それは、「自己決定 self-determining」（WF p. 2）とも呼ばれ、「人間を、どんな理由や規則に従うべきか、自分自身で決めることのできる生き物」（WF p. 2）とする思想である。この思想は、「人類は進歩しうる」・「社会的発展は可能である」（WF p. 5）という前提とともに、自律的な主体による適切な選択が社会および人類をよりよい状態へと変化させるというヴィジョンを描く。そこで、人は、伝統的な価値観から解放され、「独立 independence」（WF p. 5）した主体となることが理想とされる。

このような思想を内面化したウィトゲンシュタインの自己理解は、「孤独と隔たり loneliness and separation」（WF p. 1）・「自己の喪失 a loss of self」（WF p. 7）・「孤立 isolation」（WF p. 7）と言い表される。これは、モダニズム的精神が、自己の独立性を保証する代償として、自己の範囲（内側）を最小限のものとし、主体がアプローチできる他者を根こそぎ失わせる、「完全な孤独（utter loneliness）」（WF p. 7）であることを意味する。

モダニズム精神を自己疎外として被るウィトゲンシュタインの状況は、モダニズム的な主体概念を極めてシリアスに引き受けた結果と考えられる。ウィトゲンシュタインの態度は、モダニズム的主体概念の単なる否定でもなければ、諦めによる順応（消極的な是認）でもない。ウィトゲンシュタインは、人間の根源的なあり方について、人間のアイデンティティは伝統的な共同体においてはじめて形成されるのだと主張するわけではなく、だからといって「自律性と自己充足」に基づいた時代へと適応していくわけでもない。そうでなく、伝統から解放された主体のありようを、新たなる「牢獄 prison」（WF p. 1）として被ってしまっているのである。ウィトゲンシュタインのモダニズムは、伝統から解放された主体概念の否定でもそれへの順応でもなく、そうした主体概念によってもたらされる拠

り所のなさ[7]である。「彼は自身の時代に居場所を感じることがなかった（he did not feel at home in his times）」（WF p. 10）。

このように、ウィトゲンシュタインがモダニズム精神をある意味で徹底して（ウィトゲンシュタイン流にいえば「病的」に）体現してしまったと考えることで、自身が引き受けざるをえなかった時代精神が、いかに自己疎外として働いてしまったかを反省的に考えることの必要性、ウィトゲンシュタインが「治療」として哲学を必要としたことが理解されてくる。

2.2　文体（スタイル）の標準化に抗う

それでは、WF 一章のフレームワークを読み手が受け入れることで、どのように、内面化したモダニズム精神との格闘がなされるだろうか。それは、簡潔に言うならば、「比喩」（「直喩 simile」（WF p. 14）、「隠喩 metaphor」（WF p. 31））に溢れたウィトゲンシュタインの仕事を、それらを除外して成立する何ものかへと作り変えてしまおうという衝動に自覚的となることである。なぜこれがモダニズム精神との格闘となるかというと、私たちは、ウィトゲンシュタインのテクストに接する際に、眼前に与えられた言葉から得られるイメージ、言葉自体がもつ表情、そして特定のイメージや表情がもたらす世界観を捨象して得られる何ものかを、言葉の外に求めてしまいがちであるからだ。WF 二章に従えば、これを無意識的に行なうことで（引き受けるべきこととして従ってしまうことで）、私たちは、モダニズム精神を体現してしまうことになる。

---

[7] ウィトゲンシュタイン哲学における拠り所のなさは、WF において、「方向感覚の喪失 disorientation/loss of orientation」（WF p. 12）、「流浪の in exile」（WF p. 12）、「拘置 imprisonment」（WF p. 13）とさまざまな仕方で表現される。これらのキーワードは、ウィトゲンシュタイン哲学のモダニズム的解釈を行う上で興味深く、本格的に取り上げて論じられるべきである。だが本稿は、モダニズム的精神への葛藤がフェミニズム的な観点であることを論じることに主眼があるため、今後の課題とする。

なお、WF 二章は、ウィトゲンシュタインの比喩の具体的な吟味よりも、方法論を与えることに注力しているため、以下では、私自身が積極的に言葉や具体例を補った解説となっていることを断っておく。

さて比喩は、その言葉の辞書的意味からして、あたかも、常に何か別の言葉に置き換え可能であると思わせる。つまり、言葉の持つイメージや表情を取り去っても、そこに何か本体が残るはずだ、そして捨象による損害は本質的なものではない、と思わせてしまう。哲学において、その傾向は顕著である。ウィトゲンシュタインの読み手は、彼の比喩を、別の言葉に置き換えることができる、いやむしろそうしなければならない、と考えてしまいがちである。私たちは、ウィトゲンシュタインのテクストにおいてある比喩が与えられたとき、しばしば、「一体何が言いたいのかわからない」という反応をとる。

例えば、『哲学探究』52 節を見てみよう。

> ネズミは灰色のボロ布とほこりから自然に生まれてくるのだと仮定したい気持ちが私にあるのなら、ネズミがどんなふうに隠れているのだろうかとか、そこからネズミがどのように出てくるのだろうかとかを明らかにするために、そのボロ布を詳しく調べるのは良いことである。だがネズミがそこから生まれるのはあり得ないと私が確信しているのならば、そうした調査は余計なことだろう。
>
> だが、哲学にあってこうした詳細な観察に反対するものが何なのかを理解することを、我々はまず学ばなければならないのだ。（PU §52）

ここで私たちは、ネズミ、灰色のボロ布、ほこり、といった言葉に戸惑う。そしてこの比喩がもたらすイメージや虚構の内部に入り込み、これを堪能しようとするよりも（ウィトゲンシュタインが与えた比喩そのものをよく探索しようとするよりも）、これらの言葉でウィトゲンシュタインが言いたいことの本体を言葉の外に措定し、それを読み解こうとする。

もし比喩そのものをよく見てとろうとするなら、もし私が、「ネズミは灰色のボロ布とほこりから自然に生まれてくるのだと仮定」（PU §52）しているとして、私は灰色のボロ布の下に何を期待するだろうか、と想像することができる。そのような世界での私にとって、灰色のボロ布は、単に植物の繊維を織り合わせたも

のではない。ネズミを生み出す何か特別な仕掛けを持ったものである。それはネズミを守る膜かもしれないし、古いネズミの皮のようなものかもしれない。何にせよ、私は、灰色のボロ布を、いつもとは異なる視点で眺める必要がある。

ところが私たちは、そのようなフィクショナルな世界を知ろうとする（いつもとは異なる視点の使い方を試そうとする）よりも、そうした世界から距離をとって語ることのできそうな別の何ものかに気を逸らされてしまう。ネズミ・灰色のボロ布・ほこりは、それぞれ、現実の何かに対応しているはずだから、その対応物を見つけ出さなければならないと思い込むよう自分に仕向けるのだ。

この反応は、比喩は哲学にとって補助手段に過ぎない、哲学は比喩がもたらすイメージに依存すべきではない、という暗黙の前提からくる。この前提をとり続ける限り、私たちは、比喩が与えられたとき、すぐさま、本来的には比喩を用いずに言い表せるはずの思考がどこかに確保されるはずであり、そうでなければならないのだ、という構えをとってしまう。

タネシーニは、こうした私たちの構えを、「標準化」（WF p. 49）と呼び、この構えが求めるものを、「理論」（WF p. 49）と呼ぶ。ウィトゲンシュタインの読み手は、「ウィトゲンシュタインの仕事を標準化し、彼の言葉から理論を引き出そうとする衝動」（WF p. 49）を有している。私たちは、比喩そのものを受け止めることができず、比喩によって示唆される、比喩とは別の何ものかを志向する。そのとき、ある比喩がどのようなイメージ・虚構の世界を提供するかの調査は軽視される。むしろ、その比喩がもたらす世界観一式に訴えなくとも言える何ごとかを比喩の外に生み出そうとする。いわば、比喩が与えられたとき、私たちは、比喩自体を見ようとするのではなく、比喩を見なくても済むようにするのである。

ここで、比喩とは、哲学の「クィア性」（WF p. 32）であると言おう。哲学者は、比喩の成果を利用しながら、比喩の地位を貶めてしまっているからだ[8]。そのた

[8] 哲学の「クィア性」を考えるとすれば、スタンリー・カヴェル（1994）の次の言葉は示唆的である。「ジョン・スチュアート・ミルが『女性の解放』の第三章で行った驚くべき告白を私は想起する［…］。それは、このテクストが全体として本質的に自伝であることをあらわにする瞬間である。じっさいミルが問題にしているのは、歴史上に名を残した知識人のなかに女性の数は少ないけれども、女性が知的独創性の点で男性

め、ある比喩がどのようなイメージ・世界観を提供するかの探索を行う方法に不慣れである。WF 二章は、このことに気づき、自覚的となる方法を示している。

3　フェミニズム的困難に置かれている個人への示唆

WF は、ウィトゲンシュタイン哲学をモダニズム精神との内的葛藤とみなし、このフレームワークを私たち読み手が背負うことで、私たち自身が、モダニズム精神の内面化に気づくための方法を示した。読み手は、ウィトゲンシュタインのテクストで比喩に出会ったとき、比喩そのものが成し得ていること、すなわち言葉がイメージという世界観一式を提供していることを軽視し、眼前にある比喩の外に、イメージを捨象して得られる思考を求めてしまう。WF は、二章までで、まずこのことへの自覚を促している。

WF のフェミニズム的課題への寄与は、三章から五章で展開されている。しかし、WF の基本的なコンセプトを示す一章と二章との検討を経た時点で、フェミニズム的困難に置かれている個人への示唆が得られるように思われる。

その示唆は、二点ある。第一に、内面化したモダニズム精神との格闘というフ

と同等だという彼の確信がどこから来るかである。ミルによれば、一般的に女性は制度に適合した形で自分の考えを提出する訓練を受けていないが、それは、いいかえるならば、ある種の制度のなかで女性の数が欠けているのは、女性が思想に欠けているからではなく、当の制度の構造によるということなのである。ミルはさらにこう言う。「男性の著作家によって出版される独創的な思想のうち、じつは女性の暗示に基づいたもので、男性はただそれを検証し洗練させただけである場合がどれほど多いかを、だれが知ろう。私自身の経験から判断すれば、男性の思想の非常に大きな部分がいま述べたことに当てはまる。」この見方によれば、西洋の高度な文化の非常に大きな部分が盗用されたものであり、自分の声ではない別の声によって語っていることになる。（これは文化が女性に耳を傾けてこなかったという告発とは異なる。そうではなくて、文化が非常に都合よく女性に耳を傾けてきたという告発なのである。）［…］」（Cavell 1994, pp. 16-17、下線強調は引用者。）

レームワークは、フェミニズム的困難に置かれているとはどのようなことかを明示化するために役立つ。

伝統的に「女性」（しばしば経済力を取り上げられた状態で家の管理を一任されてきた人たち）にあてがわれてきたケアの役割（育児や介護など私的領域においてもっぱら無償で行われる他者を気にかける仕事[9]）からの解放を謳うことは、一見すると、「女性」として扱われてきた人たちの抑圧（常に無償でケアの仕事を期待されること）を解消することであるかのように思える。実際、特定の属性を有する人たちが、制度によって一方的に特定の役割（しかも社会的に名誉があるとされてこなかった役割）に固定されることは望ましくなく、その固定性を解除しようという運動は当然なされるべきである。

しかし、「女性」をケアの役割から解放しようとする動きは、同時に、「女性」として生きてきた人たち（ケアの仕事を引き受けてきた人たち）にとって重要な、自己理解のための芳醇なリソースを削り取ることにもなりうる。というのも、ケアの仕事は、ただ単に「女性」にとって押し付けとなっていただけでなく、何かを引き受けざるを得ない状況で発せられる能動性が発揮される場所でもあったからだ。

このように、解放されることが自己理解のリソースを奪取されることにもなる状況を考えるために、WF は役立つだろう。内面化したモダニズム精神との葛藤という観点から、次のように、フェミニズム的困難を描写することができる。ケアの役割からの解放を謳うことは、一方で、これまで特定の属性を有する人たちが、経済力を取り上げられ、選択の余地のない状況で、休みもなく他者を気にかける仕事に従事させられてきたことを明るみに出す。だが他方で、これまでケアの仕事をしてきた人たちによる自己理解の蓄積に積極的な意義を与えることを難しくもする。このように描写を与えることで、私たちは、社会制度の変革の中で、個人が置かれている困難に焦点を当てることができるようになる。

第二に、比喩、および、イメージがもたらす世界観を十全に評価しようとする WF の態度は、いかに家父長制の社会が「女性」を標準化し、正しい「女性」の

---

[9] 括弧内の、ケアの役割の短い説明部分は、キャロル・ギリガン（1993）の『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』を参考にした。

生き方で人を矯正しようとしてきたかについてセンシティブとなる視点を提供する。

これまで第一波、第二波、第三波フェミニズムの運動の中で、継続的に、「女性」は捉え直されてきた。男性と同じ権利主体としての（つまり「人間」としての）「女性」、男性とは異なる身体[10]を持つ主体としての（「人間」であり、かつ、元の「人間」概念には還元されない存在であるところの）「女性」、そして、人種・階級・セクシュアリティごとに編まれるべきこととして考えられるようになった（社会構築的な）「女性」がある。[11]

これら「女性」の捉え直し、および、捉え直しを求める運動は、「女性」概念を標準化し、既存の制度の温存に有利な女性像を再生産する（あたかも新しいものであるかのような見せかけで人々を束縛する）力と切り離して考えることはできない。既存の制度とは、男性リーダーを中心として編成される組織を前提として、その組織の利益のために制定されてきた法、および、その基礎となる慣習のことである。「男性リーダー」という言葉を使わずに言うならば、組織全体の発展や進歩のために、個人の身体や生、幸福すらも規格化してしまう社会構成のことである。このような社会構成においては、運動によって捉え直された「女性」すらも、規格化を免れることは難しい。正しい身体、正しい性欲の抱き方、正しい未来の描き方、正しい幸福のあり方が要請され、結果として、捉え直されてき

---

[10] ここでは、第二波フェミニズムの特徴づけのために、「身体」という言葉を用いているが、これは、「男性」にはかくかくの身体があり、「女性」にはしかじかの身体がある、のように、ジェンダーを本質主義的に定義するためではない。むしろ筆者は、このような傾向を見直す第三波フェミニズムの取り組みを経てはじめて、つまり、女性の「正しい」身体のありようがあるはずだという措定が覆されてはじめて、女性の身体性を十全に問題にできると考える。

[11] 第一波から第三波フェミニズムの流れをコンパクトに見通しよく説明したものとして、清水晶子（2022）の『フェミニズムってなんですか？』がある。本稿もこれを大いに参照した。

た「女性」もその要請に即したアップデートに過ぎなくなってしまう。

この現状をすぐに変えることはできなくとも、WF が示唆する、比喩は哲学の「クィア性」（WF p. 32）であるという認識は、運動の成果を読み替えてしまう「標準化」に対して意識的となることを可能にする。哲学（とりわけ現代英米圏を中心とする分析哲学）は、文体（スタイル）の標準化を徹底し、本来的な論述の進め方と、便利のために取り入れられる不純な構成要素とを峻別しようとしてきた。そこでは、哲学を下支えしてきた比喩を、その力をよく理解したうえで、哲学の内部に取り込みながら蔑視するという暗黙の習慣があった。この考察を踏まえるなら、私たちは、個人にとっても組織にとっても相互に利益があるという申し出が、実は、組織全体の発展や進歩のために、新しく標準化された女性になるべきだという抑圧であることに注意することができるようになる。

4　おわりに：WF はいかにフェミニスト解釈か

ウィトゲンシュタイン哲学をモダニズム精神との格闘として読む WF は、いかにフェミニスト解釈であるのか。それは WF が、ウィトゲンシュタインのテクストの吟味を通じて、そもそもどんな個人が、葛藤を抱えていて標準化に晒されているかを考えることに資する読みを与えるからである。WF のフレームワークは、時代の変化や、ある時期に称揚されるようになった「人間」観の中で、新しい見方を被り、葛藤を抱えることになった個人のよすがとなりうる。フェミニスト解釈とは、概念に回収されざる個が自身のありようを語るすべを追求するための知なのである。

最後に、フェミニスト解釈は、基準となる解釈との距離から特徴付けられるような、応用的な解釈ではない。つまり、まずは非フェミニスト解釈があることを前提とし、その上で、それとは趣旨の異なるフェミニスト解釈が提案されるわけではない。むしろ、フェミニスト解釈は、こうした中央-周縁の枠組み自体に反省的な知のありようをしている。もし、フェミニスト解釈が、付けたり外したりできるオプションであるかのように思えるとしたら、本体の側にあるものとして想像される非フェミニスト解釈が存在するに違いないという措定があることになる。タネシーニのフェミニスト解釈は、読み手に、「どこがフェミニスト解釈な

のか」と感じさせることで、この措定に無意識的に支配されてきたことに気づかせる。これにより、読み手は、「フェミニスト解釈」というものを、はじめから周縁化して（デフォルトとなる解釈に彩りを与えるオプションとして）捉えてしまっていることを自覚することができるのである。

参考文献

Cavell, Stanley (1994), *A pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises*, Harvard University Press.（中川雄一訳『哲学の「声」：デリダのオースティン批判論駁』、春秋社、2008 年。）

Fricker, Miranda (2007), *Epistemic injustice: power and the ethics of knowing*, Oxford University Press.（飯塚理恵訳・佐藤邦政監訳『認識的不正義：権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』、勁草書房、2023 年。）

Gilligan, Carol (1993), *In a different voice: psychological theory and women's development*, originally published: 1982, with new introduction, Harvard University Press.（川本隆史, 山辺恵理子, 米典子訳『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』、風行社、2022 年。）

Manne, Kate (2017), *Down girl: The logic of misogyny*, Oxford University Press.（小川芳範訳『ひれふせ、女たち：ミソジニーの論理』、慶應義塾大学出版会。）

Mouffe, Chantal (1995), “Democratic Politics and the Question of Identity”, *The Identity in Question*, edited by John Rajchman, Routledge.

Perloff, Marjorie (1996), *Wittgenstein’s Ladder: Poetic Language and the Strangeness of the Ordinary*, The University of Chicago Press.

Tanesini, Alessandra (2004), *Wittgenstein: a feminist interpretation*, Polity.

Vinten, Robert (2022), “Theolologicophilolological Investigations: Is Wittgenstein’s Tractatus a Modernist Work?”, *Philosophical Investigations*, 45(3), pp 274-296.

Ware, Ben (2013), “Wittgenstein, modernity and the critique of modernism”, *Textual Practice*, 27(2), pp. 187-205.

—— (2015), *The Dialectic of the Ladder: Wittgenstein, the Tractatus and Modernism*, Bloomsburry.

Wittgenstein, Ludwig (1965), “A Lecture on Ethics”, *The Philosophical Review*, 74(1), pp. 3-12.

—— (1989), *Logisch-philosophische Abhandlung/Tractatus logico-philosophicus: kritische Edition*, edited by B. F. McGuinness and J. Schulte, Suhrkamp.

—— (1998), *Culture and Value: A Selection from the Posthumous Remains*, edited by Georg Henrik von Wright; in collaboration with Heikki Nyman; revised edition of the text by Alois Pichler; translated by Peter Winch, Rev. 2nd ed. with English translation, Blackwell.（丘沢静也訳『反哲学的断章——文化と価値』、青土社、1999 年。）

—— (2009), *Philosophical Investigations*, translated by G.E.M. Anscombe, P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Rev. 4th ed. by P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell.（鬼界彰夫訳『哲学探究』、講談社、2020 年。）*略号は PU

稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優編（2020）、『フェミニスト現象学入門：経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版。

——（2023）、『フェミニスト現象学：経験が響きあう場所へ』、ナカニシヤ出版。

清水晶子（2022）、『フェミニズムってなんですか？』、文藝春秋。

平出昌嗣（2004）、「モダニズム小説と現代批評」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第 52 巻、pp. 255-60。

中澤瞳（2023）、「はじめに」、『フェミニスト現象学：経験が響きあう場所へ』、稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優編、ナカニシヤ出版。

サリー・ハスランガー、キャスリン・ジェンキンズ、タリア・メイ・ベッチャー、ティモ・ユッテン、ロビン・ゼン、エリザベス・アンダーソン、クリスティ・ドットソン、アリソン・ワイリー、木下頌子・渡辺一暁・飯塚理恵・小草泰編訳（2022）、『分析フェミニズム基本論文集』、慶應義塾大学出版会。